

ジャック・アタリ著「危機とサバイバル― 21世紀を生き抜くための〈7つの原則〉」作品社、2014年2月10日刊を読む(Ⅱ)

## サバイバル戦略に必要な〈七つの原則〉

### 第1原則〈自己の尊重〉(Respect de soi-meme)

自らが、自らの人生の主人公たれ。そして、生きる欲望を持ち、自己を尊重せよ。

まず、生き残ることを考える前に、生きる欲望を持つことである。そのためには、自己を完全に意識し、自己嫌悪に陥ることなく、自らの境遇に重要性を付与せよ。〈自己の尊重〉、つまり生きる意義を探究するには、自らの肉体、身だしなみや容姿、自らの希求の実現に大いなる欲求を持たなければならない。その際、他者には何も期待できないと、肝に銘じておく必要がある。

#### 《心がけるべきこと》

- (1) 自分とは何者か？ を定義する際に、頼りになるのは自己のみであることを肝に銘じること。
- (2) いかなる危機であれ、パニックに陥ってはならない。冷静たれ。
- (3) たとえ認めるのが不快だったとしても、起きた出来事は事実として冷静に受け止めよ。
- (4) 自らが、自らの未来の主人公たれ。その際に、楽観的であっても、悲観的であってもならない。

### 第2原則〈緊張感〉(Intensité)

20年先のビジョンを描き、常に限りある時間に対して〈緊張感〉を持て。

常に長期的な展望を描かなければならない。自らのために、20年先の自己のビジョンを身につけ、それを絶えず更新するのだ。

#### 《心がけるべきこと》

- (1) 長期的な視野から有益だと判断したのであれば、即座に犠牲を払う判断力を養うこと。
- (2) 同様に、唯一希少なものは時間であり、人生は一回限りであることを忘れてはならない。
- (3) 常日頃から、今を人生最後の瞬間として生きる心構えを持つこと。

### 第3原則〈共感力〉(Empathie)

味方を最大化させる「合理的利他主義」を持つために、〈共感力〉を養え。

いかなる危機においても、どのような脅威や大激動に直面しても、敵または潜在的同盟者という他者の立場に立って思考すべきだ。

#### 《心がけるべきこと》

- (1) 敵にしろ味方にしろ、彼らの文化・論証形式・存在意義を理解すること。
- (2) 起こりうるすべての脅威の正体を突き止め、味方と潜在的敵対者を区別するために、彼らの行動様式をあらかじめ把握すること。
- (3) 他者に対して常に友好的にふるまい、継続的な同盟関係を結ぶために彼らを迎え入れること。
- (4) 「合理的利他主義」を実践すること。そのためには、きわめて謙虚にふるまい、他者の精神的

自由を尊重する必要がある。

(5) 恥辱や怒りの感情を示すことなく、敵にも理があることを認められるようになること。

合理的利他主義 利他主義とは、他人の幸福・利益を目的として行動すること。利己主義の反対語。著者アタリは、自己の生存には他者が必要であり、「個人の自由」と共存可能な「合理的利他主義」が新たな民主主義の基盤となるとしている。

#### 第4原則<レジリエンス>(Résilience)

柔軟性に適応した者だけが、常に歴史を生き残る。<レジリエンス>を持て。

脅威の正体は危機の種類によって異なるが、いったん危機の正体を突き止めたのなら、あるいは脅威の一つが具体化したのなら、精神・道徳・肉体・物質・財政の面で耐え忍ぶ覚悟が必要である。そのためには、しっかりとした防御や備蓄を行ない確信を深め、計画変更を検討すべきである。この場合も、対策は危機によって異なる。

<レジリエンス> 「resilience」は、抵抗力・復元力・耐久力とも訳される言葉で、心理学用語として日本でも定着している。「困難な状況にもかかわらず、しなやかに適応して生き延びる力」を意味する。

#### 第5原則<独創性>(Créativité)

“弱点”と“欠乏”こそが、自らの“力”となる。危機をチャンスに変えるための<独創性>を持て。

敵対者からの攻撃が長引いて危機が構造的となった場合、つまり、危機が常態化し、不可逆になった場合には、危機を好機に変える方法を学ばなければならない。

#### 《心がけるべきこと》

- (1) 自分が持っている資源が不足しているのなら、何が欠けているのかを理解し、不足を自分の進歩に変えること。
- (2) 敵の力を、自己の利益に呼び込むこと。そのためには、ポジティブな思考力、運命の甘受の拒否、勇気、独創的な実践が必要になる。こうした美德は、筋力トレーニングと同様に、日々の鍛錬が必要だ。

#### 第6原則<ユビキタス>(Ubiquité)

あらゆる状況に適応できる<ユビキタス>な能力を持て。

攻撃が継続し、状況がさらに不安定になる場合や、その状況のポジティブな利用価値がまったく見出せない場合には、根源的な変化を遂げる必要がある。危機的状況に耐える術を心得ている人々の最良の部分を取り入れながらも、勝者の陣営へと移るために、自己そのものをモデルチェンジする準備を進めなければならない。

ただし、<自己の尊重>を失ってはならない。自らのアイデンティティにおいて常に機動的であるためには、<ユビキタス>と<レジリエンス>という二重状態を保つ心構えが必要である。

<ユビキタス> 「いつでも、どこでも、だれでも」に適応できること。

#### 第7原則<革命的な思考力>(Pensée évolutionnaire)

危機的状況に対応できない自分自身に叛旗を翻す<革命的な思考力>を持て。

最後に、どうしようもなく追い詰められ、正当防衛が不可避な状態に陥った際には、極端な状況に

対応する心構えが必要である。さらに踏み込んで言えば、ゲームのルールを踏みにじってでも世界に対して叛旗を翻すのだ。このときも、変わらず<自己の尊重>は必要だ。したがって、この最後の原則は、最初の原則へと連環し、この<七つの原則>は、全体として首尾一貫する。つまり、<七つの原則>は円環なのである。

＊ いかなる危機に陥った場合でも、この<七つの原則>を実践し、その適用性を絶えず検証する者は、サバイバルできる確率が、はるかに高くなるであろう。

みじめな境遇にあらうが、自分を権力者と考えようが、偶然に期待してはならない。自己革命なくして、より良く生きることなどありえないのだ。サバイバルなくして革命が起こるわけがないのである。

かつて、マハトマ・ガンディーも次のように語ったではないか。  
「あなたが世界の変革を願うのなら、まずあなた自身が変わらなさい」。

P28 ～ 33

[コメント]

現代のフランスの知性といわれるジャック・アタリ氏の日本と世界、そして何よりも祖国フランスへの警鐘の書の最新版。その最重要概念が、今回、御紹介させて頂いた7つの原則。この7つの原則を自分自身に、自分の所属する企業や組織に、自治体に、日本に、更には世界にあてはめてみたい。どのようにあてはめるかは、本書を参考に自分自身で考える以外にない。

— 2014 年 2 月 7 日 林 明夫記 —